

# 地理野外学習の展開事例

藤 田 佳 久

## 1 はじめに

地理学習における野外調査、野外観察、巡検などの野外学習の果たす役割はきわめて大きい。地理教科の目的である各地域の自然現象や人文現象を理解するにあたって教室の机上だけの学習では具体的現象を理解するには限界があるからである。その点においてこの野外学習はそれら諸現象に関する理解度を定着化させ、それを通して教室における授業へもその関心を還元せしめる多くの可能性をもつものとしてきわめて有意義だといえよう。

野外学習の目的は教室では困難な具体的な各地域の地理的事象を対象として、科学的に分析し考察するものである。そのさいそれらの諸事象を正確に把握し、しかもそれらが活動的に把握されなくてはならない。それゆえに野外学習の規模、野外学習の時期、野外学習の対象、野外学習地点への距離、それらを支える学習段階などすべてを網羅して考慮せねばならずその実施はきわめて多大な準備と計画を必要とする。それに加えて多くの生徒を野外で一斉に指導することの困難性、野外実習のための時間配置の問題、指導教官の数、生徒の交通安全や健康管理の配慮など実施運営にあたっての技術的な問題がある。そのためには一般的には計画倒れになりがちとなる。したがってその妥協策として、事前指導を与えた上で休暇中に生徒本位の調査を課し、それをレポートさせる方法もとることになる。

このような問題をふくみながらも地理教科における野外実習の有意性を否定できるものではない。そして野外実習の実施運営および技術的処理の問題で最も重要な内容が学習内容に存在することである。しかも本校のごとき中学と高校の併設校にあっては中学1年の社会科地理分野と高校地理との有機的関連も考えねばならないし、それらの教科との別組織である郷土誌クラブにおけるクラブ活動との関連性も考慮せねばならない。それらの関連性は実に重要である。

ここではそれらをふまえて本校における1968年度における野外実習実施計画と実施状況にふれ、とくに高校1年における野外学習を事例として、それを通してこの野外学習の問題点および今後における方向性を把握したいと思う。

## 2 本校における実施計画と実施状況

本校は名古屋市東部丘陵東山地区に位置する。その通学圏は若干市外通学者もみられるがほとんど市内全域にわたり、バスおよび地下鉄による通学者が圧倒的である。生徒は事務所経営者とサラリーマンの家族が多く、その生活環境はその点で同質的である。したがって自然および第一次産業に関する体験的認識はもちろん、見聞もきわめて少ない。またそれに関する知識も知識として存在し、定着化していない。このことはまた生徒をつつむ第二、三次産業の社会に関しても体験的認識はきわめて少なく、体系的把握もきわめて欠如している。

このような状況にあって中学、高校段階の野外学習のもつ意味は重要である。中学校段階ではその地誌的教材に関連して郷土学習の一方法として野外学習の機会がもたれることに意味がある。とくに日頃見聞する見近な地域社会が地域的に統一の中で機能し、地域外とも具体的な流通機構で統合し、その各々が動能性をもっているということの体験的認識はきわめて貴重である。そのために本校ではかつて名古屋市内の都市計画と工業を対象としたバスによる巡検も実施されたことがある。それに対して高校段階の野外実習は授業内容の裏付けはもちろん、多くの地理的事象をより正確に把握し、その具有する意味を分析かつ考察することが意味をもっている。それはさらに諸現象を支える機構の把握への発展、それを通しての一般性の把握への足がかりとなるものである。本校においては従来夏期休暇における5日間林間学校において若干展開された。しかしこの林間学校はあくまで木曾駒岳登山が中心であって、地理的野外実習は観察項目が「しおり」に印刷され、地形図を使用しスライドを使用する事前指導が実施された程度で、現地における指導は必ずしも十分ではなかった。

1968年の夏期に岐阜県大野郡高根村日和田に本校の林間学舎が建設されたことは、比較的自由的な利用計画が許容され、従来の学校諸行事の検討ともあわせて、地理の野外学習に対しても一つの大きな機会が与えられることになったのである。もちろん林間学校における教科学習的側面はそれ自体が目的でなく、また林間学校地点は固定的であり、それゆえそれを通して日頃

地理野外学習の展開事例

の授業を裏付ける機能は必ずしも満足に果たされな  
いだろう。しかしそのような条件の中でいかに野外学  
習側面をもち込むかは今後の課題でもある。

また郷土誌クラブの活動はここ数年間野外調査を中  
心とし、比較的めん密な実態把握を心がけてきた。人  
員の上で意志が統一しやすく、時間的制約も教科指導  
のそれに比べて少ないため、その実施は比較的容易で  
ある。クラブ活動日は中学、高校とも統一し、その関  
連につとめてきた。活動内容はテーマの選択がなさ

れ、中学、高校別々である。テーマは半年間単位で総  
括され、文化祭、機関誌に発表する。1967年の海部郡  
立田村の調査におけるごとく、授業の枠をこえかなり  
の程度まで実態把握を深めることができた例もある。  
しかし中学のクラブは観察巡検の性格が強くなるのは  
やむをえない。

次に1968年度における地理野外実習の計画と実施状  
況を示そう。多少細部に変更はあったが、ほぼ実施さ  
れてきた。

地 理 教 科		郷 土 誌 ク ラ ブ	
中 学 1 年	高 校 1 年	中 学 校	高 校
4月 遠足コースの観察地 点(大高緑地)に關する 事前指導	4月 遠足コースの観察地 点(高蔵寺ニュータウ ン, 明治村, 小牧山) に關する事前指導と野 外観察指導(巡検)	3月 多目的矢作ダム巡検 4月 と地元旭町調査の事 前および現地指導	4月~11月 ①伊勢湾台風 を再考するための関 係機関および現地調 査に關する事前およ び現地指導
7月 名古屋市内各区単位 の地域共同調査(夏期 休暇中に調査を実施)	7月 夏期林間学校(高根 村への木曾コースと現 地)の観察および調査 に關する事前指導(後 述)	5月~11月 ダム開発に關 する関係機関訪問調査 と発表指導	②桶狭間古戦場地点に 關する事前および現 地指導
7月 夏期臨海学校におけ る観察地点の事前指導			(いずれも生徒の計画 により随時に実施)
11月 遠足コースの観察地 点に關する事前指導 (コースは高校と同 一)	11月 遠足コース(高蔵 寺, 道樹山, 古虎溪) の観察地点に關する事 前指導	12月 本年の活動総括および来年度活動のための中高 合同巡検(富士鉄名古屋工場—桶狭間古戦場と田 楽坪—名古屋臨海—鍋田干拓—津島神社)の事前 および現地指導。一般生徒も参加。	
	1969年2月 第2, 3次産 業の生産流通活動に關 する巡検(予定)		

その多くは遠足あるいは夏期学校など学校行事を利用  
して行なっている。中学三年の修学旅行も同様である。  
郷土誌クラブにおける主体的な実践活動と比較する  
とかなり対照的である。これは教科指導における野  
外学習がいかに困難であるかということ、学校行事  
を通じてその可能性を見出さざるをえないことという  
方向の妥協のあらわれでもある。もちろん教科の立場  
からの野外学習は実施した(中学)し、実施の予定(高  
校)であるが各々問題は多かったし多いと予想され  
る。

こうした中で学校行事の一つとして高校1年の夏期  
林間学校のうちで地理の野外学習が地学、生物となら  
んで実施されることになったのはきわめて有意義であ  
った。1968年が最初の試みであったが、今後の展開  
のためにもその実施例を以下に示したい。

3 林間学荘付近における野外調査  
実施実例

(1) 経 緯

1968年8月2日に開校式の行なわれた林間学校は従  
来の慣行を引き継ぎ高校1年生を中心にして対象とし  
て利用がなされることになった。そのさい初年度のため  
もあっていくつかの問題点が存在した。一つは指導  
計画のおくれであり、一つは建物の規模にともなう分  
割利用である。前者は事前準備にも影響を与えたが、  
山歩き、地学、生物とならんで地理のグループ研究が  
全日程のうち一日実施されることが決定され、後者か  
らは収容能力の上からクラス単位の利用方法が決定さ  
れた。そこで地理の野外学習の機会は次の2つに与え  
られることとなった。一つは高校1年全体に対する地  
理分野の指導であり、一つは地理グループに対する地  
理分野の指導である。したがって各々の事前指導が必  
要となった。

(2) 事 前 準 備

① 予備調査と巡検。

学荘利用計画は林間学校計画委員会にて立案さ

れ、教科指導計画を実施する見通しのもとに5月末関係教科によって現地の予備調査と巡検を2泊3日で実施した。地理教科では名古屋から学荘地点（御岳の東北山麓、岐阜県大野郡高根村日和田留野原）までのコースにおける観察事項、現地の役場、森林組合などで高根村の経済状況を調査した。

## ② 事前指導

(ア) 学年全体。地理教科における第1学期の授業は自然環境を主としている。したがって学荘へ至るコース近傍の地形と土地利用、高根村における土地利用と山村の生産活動、御岳火山の地形に関する事前指導を授業時に行なった。学習単元段階の上からは林間学校利用は好都合なフィールドとなりうることを認める。また予備調査にもとづいて作成し生徒に配付した「林間学校のしおり」と地形図を使用して実施直前における学年集会の一部を使い総括的な指導を行なった。しかし全体の実施計画内容が直前までその決定が遅れたこと、各クラスの行事日程が比較的自由になされたために現地での各生徒の行動範囲が統一されない見通しから、指導上の焦点が不明確となり、指導が十分個々の生徒に定着したとは思われなかった。

(イ) 地理グループ。その点地理グループの指導は統一しやすかった。しかし各クラスの計画が自由であったこと、クラス単位の利用であること、社会科の各教官が各クラスを担当するために地理グループの活動予定内容は多様であった。以下は筆者の担当したグループに関してふれよう。

地理グループは45人のクラスのうちの希望者から構成された。希望者は男子7名、女子7名、計14名であった。現地での活動時間は第二日目が一日中野外学習のためにあてられることになったため、その時間内での活動として、①山村の土地利用に関する観察と調査、②地元日和田部落の農家インタビューを通しての山村の生活調査、の二目標を設定した。①については日和田周辺の水田面積の測定、稲の植付状況の観察、稲の出穂状況の観察、水田における水温の追跡調査、畑作物と牧野の観察を実施することにし、個々について指導した。②についてはインタビュー用紙を生徒に印刷させ、全体を3つの4～5人からなる小班にわけ、小班毎に個別に調査することとし、グループ長とともに小班長を決定した。インタビュー内容は、㉑家族構成に関する事項、㉒通婚圏に関する事項、㉓農家収入に関する事項、㉔農作物カレンダーに関する事項、㉕農作業、わらび、林業、出稼ぎなどに関する事項、㉖民俗（行事一覧、祭礼、習慣、言語など）に関する事項、㉗生活圏

（進学、就職、医者、出稼ぎなど）に関する事項などである。それとともに山の人々の生活について包括的話しを加えた。しかし時間的制約の関係があり、生徒はインタビューの未経験者ばかりであったことから実感としての認識を予察することがかなり困難で、予備知識は生徒自ら貯えられなかった。この点のはちに実地にインタビューをしたあとの生徒たちの実感としての反省をもたらすことに至るのである。

## (3) 実施過程

### ① バスからの観察（全体指導）

8月2日。バス1台で本校を出発。学荘までの6時間、随時バス中から観察事項の指摘を行ない全体の生徒に対する指導を行なう。木曾川流域を源流にまでさか上るコースは地理的事象の観察には事欠かない。春の遠足で見学を行った高蔵寺ニュータウンを右手にやがて内津峠をぬけると広々とした木曾川河谷に入る。多くの河岸段丘、下流の洪積台地、断層地形、黒ボク土壌、そしてそれらの土地利用は典型的である。また中央線複線化と中央道建設計画にともなう木曾谷の「夜明け前」を把握。旧中山道の街道集落を観察し開田村に至る。開田村は高冷地野菜を成功させている山村であり、村内の土地利用は高根村とも類似する。多くの指摘を加えたが、コース全般の地形図を渡さなかったし、買い求めて持参したものが数人だったため、個々の事象はともかく、それらの事象が空間的に位置づけられて理解されたかについては問題があった。しかし次々に展開する車窓の事象に関連的説明が加えられることによって観察方法に意義を見出した生徒もいたようである。

### ② 現地での事前指導（地理グループ）

8月2日の夜、翌日に調査をひかえての地理グループの事前指導を行なう。とくに調査をすすめる上での留意点を重視し話し合う。①日和田部落の状況について地図で概説。そのさい当日祭礼であるからその点に留意すること。②はじめて村に学荘が出来、はじめて生徒が村人たちと接触することの意味と留意点。③調査内容の確認とインタビュー技術について。④男女混合の3小班の確認。⑤翌日の行動予定。⑥持参記録ノート、器具の分担と服装など。

### ③ 当日の行程（地理グループ）

7時30分。学荘出発（徒歩）。以下コースは第1図に示した。生徒14名。教官1名。学校長が途中から同行。時々通る乗用車は祭礼のために村外からの帰郷した人たちが乗っている。とくに危険はないが注意を与えて自由に徒歩。途中左方の溶岩の張り出した巨礫堆積と馬頭観音の観察。

地理野外学習の展開事例

8時40分。小日和田部落入口着。牧棚，薪炭，デントコーンおよびソバ畑の観察。水田の出穂状況と水温調査。稲株数調査。

9時00分。日和田部落着。途中水田水温の追跡調査，水田面積の測定，家屋の観察を行なう。部落の中央にある神社に到着。祭礼のため境内に出店がある。出店の人から聴き取り。なお各小班が訪問すべき家を隣接する小学校の先生から紹介してもらう。

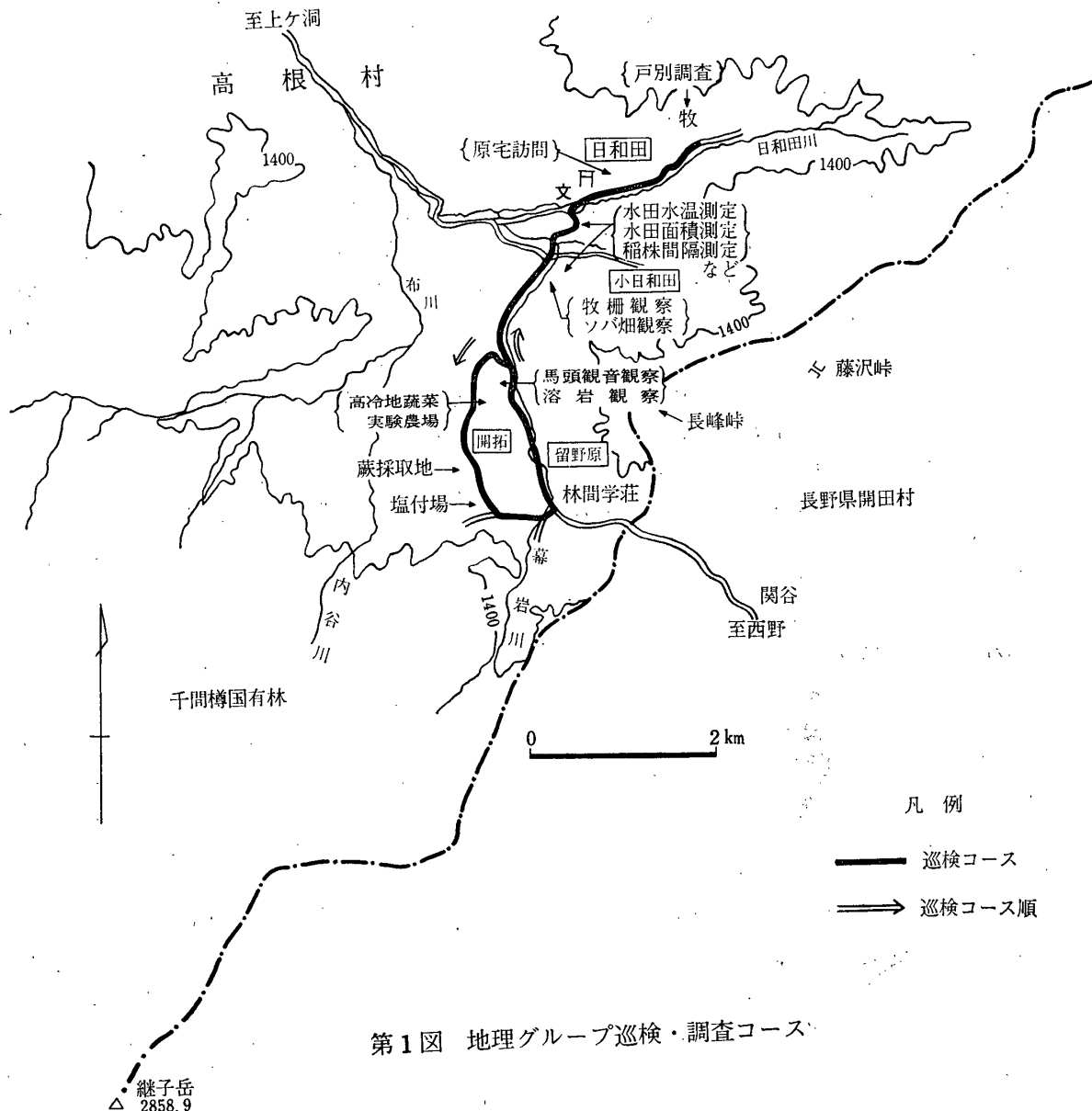
10時00分。原宅着。かつて多くの馬小作をもち馬親方，大地主として経済力をもっていた原宅を訪問。家屋の配置やその規模を観察。旧馬屋の二階にあるからかさ天井を見る。いずれも原氏から詳細な説明を受けた。あと原宅の一室で原氏をかこんで日和田の人々の生活について自由に話しを聴く。インタビューの経験にもなった。なおあわせて山菜をごちそうになり山村の生活の一端を味わうこととなった。ついでに昼食をとらせてもらう。

12時30分。3小班にわかれて各々農家でインタビューを行なう。祭礼中にもかかわらず紹介された家は留守が多く，牧部落でのインタビューが中心となった。各農家には教官が付き添ってお願いのあいさつを行なった。しかし生徒だけになると都市とは異質であるふんいきに慣れず，しかも相手が大人であり，インタビューそのものが技術的にむづかしかったようである。しかしこの経験は貴重で「もっと多くの家を訪ねてみたかった」と感想をもらす生徒が多かった。開拓村を訪れた他のクラスの生徒も同じような感想をもっている。

14時50分。集合し開拓経由で帰路へ向かう。高冷地ゆえあまり汗も出ず歩く時間の割合に疲れない。途中開拓地で高冷地野菜の試験地，灌漑貯水池，塩付場などを観察。

17時00分。学荘着。

20時15分～21時00分。地理グループの反省会。各



生徒がそれぞれ感想を述べる。やはりその中心事項は原宅以後各小班で実施したインタビューに絞られた。山の人々の生活様式に一同驚きながら、インタビュー技術への反省に集中した。「話がつづかない」、「質問の出し方がむづかしい」、「生徒だけだから引込み思案になりがち」、「予備知識をもっと入れておいたらよかった」など各生徒自身の初めての経験をそのような形で表現するのは当然であった。「相手の人はよく話してくれた」「山の生活に興味をもった」「できたらもっとインタビューしてみたい」という意向が同一生徒からも出され、自分の相手に対するコミュニケーションがうまくいかぬことに対するじれったさがすべての生徒の心に生じたものと思われる。結果として「私はもっと広く地理、歴史、経済などの知識が必要なのだ」という感想が聞かれた。教官からは山村の生活をその日の経験の上に体系化し、各自が村の人々と会話している時に感じたことを大切にしておくよう指導する。なお途中まで同行した校長からは、事前段階における問題点の把握、質問内容の深まりの努力などについて感想と指導がなされた。

#### ④ 全体発表（地理グループ）

最終日の午前中に他の山歩き、地学、生物の各班とともに実施。地理班では班長の司会により日和田部落を中心に行った調査の目的、方法、結果、および感想が述べられ、次いで各小班長が調査内容を要約発表し、質問を受けた。

#### ⑤ 事後指導（地理グループ）

次のような事後指導を行なった。

- (ア) 各小班別に調査レポートを提出する。
- (イ) お世話になった原氏や訪問した農家に礼状を出す。
- (ウ) スライド上映による現地の再確認。
- (エ) 林業教材指導時における高根村の位置づけ。

#### (4) 評価

地理グループの活動に関する評価は彼らのレポートと林間学校の感想文内容からなされよう。個々のレポートは彼らの調査内容で満たされ、かなり総合的に構成しえたものもある。そして表現が生き生きとしていることは彼らに強い印象を与えたと同時に、彼らの観察が比較的敏感であったことも示している。未知の世界に対する彼らの初めての経験のよこびが見出されるように思われる。ただそのさい単なる興味本位の熱つばさで終わるのではなく、また単なる心情的感覚の変化として終わるのではなく、それらの調査を通して得られた知識をより一層正確なものにすると同時に、それを体系的に構成し理解する段階までの見通しを彼らに与える指導が必要である。それには一層の事前準備

が必要になる。

そして今回インタビュー形式をとったことがそれらとは十分関係しながらも別の意味で重要な意味をもったと思われる。それはインタビューという方法の中にある。異質の社会環境にあつて自分たちの家庭環境とは異なる社会人としての大人に対置したときのある種のとまどいを生徒が感じたことである。前に述べたようにコミュニケーションのじれったさ、しかも相手の思考様式が都市では考えられない態度で迫ってくる場面において、単にインタビューがまずいという技巧的な問題とは異質の感じを受けたということである。そこではじめて相手とはちがった社会の自分を客観化できたということであろう。日頃各地域の差異が単に物質量の差異のみで示されてきた教科にあつて、それがそこに生活する人々の思考方法の相違にまでかかわっていること、そして自分が考えもつかなかったことを考える人々がいるということを実感的に理解しえたことである。それが何であったかは気づかないまでも、そのような感覚を得たこと自体に大きな意義を見出したいと思う。

なお教官1人に対する生徒14人の指導は形態の上からいえば最適であった。野外調査にあつては当然生徒の動向把握が第一となるが、この程度の人員であれば調査をスムーズに進行でき、集合、徒歩などの行動把握もきわめて容易であった。またグループを構成した14人のすべてが地理の成績のよい生徒とはかぎらなかった。むしろ成績とは全く無関係であった。しかしこのような方向に関心をもっていたのは確かである。それだけに日頃の授業では味わえぬ経験をしたためにこのような方法をとらうる「地理に関心を持ちました」という生徒が数人いたことは野外学習の成果と考えてよからう。これも少人数単位であったため1人あたりの調査密度が高く生徒自身が自然にその中へ入っていかざるをえなかったためであるとも考えられる。

#### (5) 問題点

その一方で多くの問題点も認められる。まず研究グループ活動が教科内容の濃い地学、生物、地理とスポーツ的な山歩きが並列に置かれたことである。これは生徒が選択する上でとまどった原因となった。次に教科間の関連性である。地理、地学、生物は若干の共通部分をもっている。それを教科単位で生徒を指導するか、総合的に生徒を指導する形態をとるかである。もちろんそのためには各教科の打ち合わせ、調査対象の選択、指導教官の配置など考慮すべき問題も多い。次に地理の分野の指導に限定するとまずカリキュラムとの関連を考えることが必要となる。今後このような地理の野外指導が夏期に恒久化するならば、一学期の教材を従来の自然環境に加わえ農林業単元、集落単元な

ど二学期以降の関連単元を一学期に回すなど教科内容の再編成が事前指導のために必要となる。そして再編成しただけの成果を林間学校における野外指導に期待するのも可能である。ところでそのさい当然指導形態は問題になりうる。大きくは地理の野外学習の一斉指導、グループ指導、他教科との総合的指導の形態のどれをとるかである。これらは今後少しずつ試行されるべき問題であろう。それによって野外学習の対象にも若干の変化がともなう。そのための事前調査は今後も必要となろう。もちろん以上の諸点は林間学校の意義を考え、その中における教科の役割、位置づけとして考えていかななくてはならない。

#### 4 おわりに

地理の野外学習はその重要性にかかわらずさまざまな条件から実施上の困難点をもっている。本校でも同様である。そのさい教科内容から地理教科独自の実施以外にさまざまな学校行事を利用しそれに働きかけて

いくのも有力な方法であるように思われる。その一例を示したつもりである。そしてその中心問題はあくまで指導内容に置かれなくてはならない。その実施をめぐってカリキュラムの問題、中学高校における関連性、指導形態などが次に問題となるのである。

そしていかなる場合においても野外学習にあっては生徒をいかに主体的にかかわらしめるかということが大きな問題となる。彼らの関心を引き出し燃焼させ、分析しうる段階までもち上げる方法である。これも指導内容に大いにかかわっている。その意味において野外学習が単なる興味を満足するだけでなく、それ自体における指導上の完結性がある程度要求されるのである。すなわちそれは諸現象に関する位置づけが指導され、理解されるという意味においてである。そこにおいてはじめて教室における授業で野外学習が意味をもつものと確信している。

その意味において今後も野外学習が試行されていかなばならない。